

歴史的人物の肖像が変わる

東京大学史料編纂所教授 黒田日出男

歴史的人物の肖像画が面白くなってきた。日本史研究者と美術史家の肖像画研究によって、周知の肖像画の人物（像主という）の変更が次々に提案されるようになってきているからである。

例えば、あの恰幅のよい「武田信玄像」（成慶院蔵）は、おそらく信玄ではないだろう。次に、「伝足利尊氏像」とされてきた肖像画も、重要文化財の指定名称は「騎馬武者像」とされた（京都国立博物館保管）。近年では「高師直像」とされ、さらに、これは私の説なのだが、高師直の子息師詮の肖像画ではないかとされるにいたっている。もっとも衝撃的なのは、あまりにも有名な神護寺所蔵の国宝三像「伝平重盛像」「伝源頼朝像」「伝藤原光能像」も、それぞれ「足利尊氏像」・「足利直義像」「足利義詮像」であろうとの仮説が提出されたことである。像主名が変わる可能性のある肖像画は、今後もたくさん出てくるだろう。

もとより、どんな肖像画も像主が変わるというわけではない。像主が変わる可能性が一番高いのは、簡単に言えば、賛のない肖像画、箱書・裏書といったものがない肖像画なのである。すなわち肖像画は、本来、年忌法要に用いられ、あるいは正月などに掛けられたりした。たいせつに拝んでいる人たちは、賛や箱書がなくとも、それが誰の肖像画か自明であった。

しかし、それを拝む人々や集団がいつまでも健在とはかぎらない。そうした人々がいなくなると、肖像画は忘れ去られ、いつのまにか誰のものかわからなくなってしまふ。つまり、賛や箱書がない肖像画は手がかりを失い、名無しの権兵衛になりがちなのだ。

名無しの権兵衛となった肖像画が、いろいろなきっかけで再発見されると、今度はこの人物は誰なのかが問題となり、その肖像画の表現にふさわしいと思われる人物が選ばれ、新たな像主とされるのである。いったんは忘れられたものだから、その像主名に確かな裏づけ（根拠）があるわけではない。しかし、以後、それは新しい名前をもった肖像画となって蘇ったということになる。

現在、像主名の変更が提案されている肖像画には、江戸時代になってから新たに命名されたものが多い。それらを、近年の肖像画研究者たちがていねいに調べ直した結果、像主名の変更が行われるようになったという次第なのだ。

それでは、どのようにして像主名が変更されるのか。

武田信玄像の場合を示そう。この肖像画には、太刀や腰刀の金物に足利氏の家紋である二引両紋ふたひきりりょうもんがあった。武田信玄なら花菱紋はなびしもんであるはずなのだ。また、この肖像画を描いた画家は若き日の長谷川等伯なのだが、彼は能登や京都で活動していて、甲斐の武田信玄の間に接点が見つからない。そして、信玄の両親や子息勝頼の肖像画が残っているが、誰も太っていない。それに

信玄の死因は労咳（肺結核）だったらしいので、このようにでっぷりした姿ではなかっただろう。このようにして研究されていった結果、この肖像画は武田信玄像ではあるまいとされたのであった。

となると、いったいこの肖像画の像主は誰なのか。

今のところ、

能登の戦国大名畠山氏の当主の誰かであると思われる。

無論、像主が誰であれ、この「伝武田信玄像」が長谷川等伯作の肖像画の優品であることになら変わりはなないことを強調しておこう。

そこで歴史教育においては、風俗表現などから武田信玄像であることが確実な、高野山持明院蔵の肖像画と東京・浄真寺蔵の肖像画を生かすべきだと思われる。（参考文献）

藤本正行「守屋家本武装騎馬武者像の一考察」『甲冑武器研究』32(1974)、同「守屋家本武装騎馬武者像再論」『史学』53-42(1984)、同「家紋は語る」『週刊朝日百科日本の歴史』歴史の読み方8 名前と系図・花押と印章朝日新聞社(1989)、加藤秀幸「武装肖像画の真の像主確定への諸問題上・下」『美術研究』345・346(1990)、黒田日出男「肖像画と王権」同著『王の身体 王の肖像』平凡社(1993)、米倉迪夫「源頼朝像 沈黙の肖像画」平凡社(1995)、黒田日出男「大英博物館本「源頼朝像」の制作時期について」『日本の美学』24(1996)、同「騎馬武者像の像主-肖像画と『太平記』」同編『肖像画を読む』角川書店(1998)、米倉迪夫「伝源頼朝像再論」黒田編『肖像画を読む』角川書店(1998)、藤本正行「鎧をまとう人びと」吉川弘文館(2000)